

令和七年度京都大学書道部第百三十五回書展

鳴夏展

旧初夏書展

●日時

6/28 11:00～18:30 6/29 11:00～17:00

※入場は上記の30分前まで

●場所

堀川御池ギャラリー

入場無料

Re: 書道とは（僕の場合）

京都大学書道部 部長 妹尾直弥

「受け入れる」ということは、非常に難解な作業である。

この言葉を顔面通りに読めば、それは受動的な動作であるように感じるのが自然であろう。しかし実際には、「受け入れる」とことは、非常に主体的な動作なのである。そして、この齟齬は、受け入れると言う動作を、独立したものであるのではなく他の動作との連環の中で理解することによって解消できる。

「受け入れる」とは、見ることに、聞くことに、そして知ること、それら一切の他から自身への流入する動きの終着地点である。知覚したものを自身の血肉とするかの可否を決定する初めての主体的な動きとして捉えられるからだ。同時に、「受け入れる」とは、考えること、描くこと、話すこと、そして書くこと、それら一切の自身から他へ流出させる、所謂表現という動きの開始地点である。受け入れる決断は、自身から湧出する全ての表現の素材を選び取ることと同義と言えるからだ。とどのつまり、知覚と表現の過程には、「受け入れる」という段階が必ず経由されている。

ここで、最初の文章に話題を戻す。「受け入れる」とことはなぜ難解なのか？その答えは、看過されやすいその主体性にある。知覚した外部を内側に取り込む際、我々は無自覚に自分を守る方向へ、都合の良い方向へ、受け入れるものを選択しがちである。

「他人とは違うと感じていたはずの自分は、実際には何も違っていなかった」「自分の歩んでいた道は、既に多くの先達に踏み荒らされた何でもない道だった」

知覚は、言葉にならないほどの感動を多く感じさせてくれた一方で、ときに私に向けて時に自身のアイデンティティを引き裂くような厳然たる現実を見せるものなのである。

しかし、「受け入れる」とは、表現の原点である。全ての表現の源泉である。無からの創出など不可能だ。そして、書道という表現に齧りつくものの末端として、この源泉を豊かにすることへの努力を惜しむことなどできない。それこそが見る人の心に響くかを決めるのだから。

書道とは、文字を使用できるという自由を得た芸術である。

積み重なった先人の古典や技術の研鑽を基に、私が受け入れた全てを表出させる手段こそ、書道である。自然から、本から、街並みから、批判から、作品から、称賛から、大切な何かから。受け入れた全てを通して見える思考の景色を表現し、見る人が作品から感動を「受け入れる」瞬間に立ち会うために、これからも書道に取り組みたいと思うのである。

末筆になりますが、今書展の開催は、顧問の成田健太郎先生、田中健一先生、技術顧問の大原蒼龍先生をはじめとする多くの方々のお力添えによるものであり、この場をお借りして、心より感謝申し上げます。

そして、本日は暑い中、京都大学書道部第百三十五回学外書展「鴨夏展」にお越しくださった皆様、誠にありがとうございます。今書展から、夏の学外書展は「初夏書展」から「鴨夏展」への名称変更となりました。古くからの慣習に囚われるだけでなく、新たな伝統を築くその礎となる決意を込めて。部員たちの力作が輝く、新たな京都大学書道部の夏の学外書展を、どうぞゆつくりとご覧下さい。

書の水平鑑賞

成田健太郎（京都大学大学院文学研究科准教授）

書の作品を軸装したり額装したりして屋内に垂直に設置し、水平方向の視線によって鑑賞を加えることは、こんにち博物館・美術館やギャラリー、公募展の会場、さらに条件が整っていれば自宅などの私的空間でも、広く行われています。そうした水平鑑賞を書に対して初めて加えた人類は、いったい誰なのでしょうか。

もちろんそんなことは分かりようがないのですが、水平鑑賞の最も古い記録を指摘することはできます。中国・西晋の衛恒が著した『四体書勢』という文献がそれで、『三国志』の英雄として有名な曹操が行った水平鑑賞の様子が記録されているのです。それによれば、後漢末期に梁鵠という能書家があり、かつて国の人事を統轄する部署の責任者を務めていました。そのころ官界デビューを果たした若き曹操は、首都洛陽の長官の職位を志望していましたが、梁鵠はそれより格下の、洛陽北部の警察を統轄する官職に曹操を就けました。曹操のキャリアは、最初から順風満帆というわけではなかったのです。その後、天下を揺るがす黄巾の乱が起こり、曹操は機に乗じて勢力を拡大しましたが、一方梁鵠は戦乱を避けて荊州の劉表のもとに身を寄せていました。やがて劉表が死去すると、曹操は軍を率いて荊州を占領しますが、このときに梁鵠は、曹操に三十数年前のことできつと恨まれていると考え、縄でわが身を縛って謝罪し、曹操はこれを配下に加えました。それ以後、梁鵠は書の腕前によって曹操に献身し、曹操はその書を自室に吊り下げて鑑賞したといえます（二玄社『中国書論大系』第一巻・上田早苗訳を参照のうえ要約）。

曹操が水平鑑賞したという梁鵠の書は、残念ながら後世に伝わっていませんが、この伝説から、書に向き合う梁鵠と曹操の表情を想像することはできません。権力者の寛大さに感謝し、同時にそのいつ爆発するやもしれない復讐心におののきつつ書の道に励む梁鵠は、いつも悲痛なまでの真剣さをその顔に浮かべていたでしょうか。一方、天下人として世界の美を占有する曹操は、自分では到底ないような美しさを放つ梁鵠の書にも、あくまで上位に立つ者として対し、余裕の笑みを浮かべていたでしょうか。

さて、今回の書展に集まった作品は、いったいどんな表情の向こう側で生まれたのでしょうか。そしてそれらを鑑賞する人の顔には、いったいどんな表情が浮かぶでしょうか。

殿村藍田

大原蒼龍（技術顧問、日展会友 書家）

昭和・平成の天才、殿村藍田（一九一三～二〇〇〇）。近現代の作家の中で、一体どれだけの作家が後世に作品が残り、普遍的な書之美としての「古典」と成り得る事が出来るだろうか。帖学の作家に於いては、中野越南・赤羽雲庭はそこに入るに違いないが、突出した輝きを放つ殿村藍田も古典と成り得ると思っている。

殿村藍田は、天才（鬼才とも呼ばれた）の名を欲しいままにして、漢字・仮名・画に於いて人々を魅了する作品を次々と発表し続けた。青山杉雨は、藍田の作品と初めて出会った時の感慨を次のように述べている。

戦前の泰東書道院で彼を知ったのはたしか 昭和十三・四年の頃かと思う。．．． 作品の前に立った僕は「彼、怖るべし」と眼を見はった記憶

は今でも鮮やかである。

（青山杉雨「藍田近作集に寄せて」Ⅱ『藍田近作集』昭和四十二年）

殿村藍田二十七歳頃のことである。

万民に認められた作家であり、また、その書業たるや様々な作風で膨大な作品を残しており、「一体どれだけの勉強をすれば、これだけの作家になれるのだろう。」と想像を絶するものがある。

私は、若き日に殿村藍田の書画一体となった作品の数々を目にし、感興湧き立ち「私もこのような作家像を目指したい。」と心に秘め、拙会派の中では異

端ながらも水墨画と仮名（万葉仮名・草仮名が中心ではあるが）を独学で行うようになった。無論、及ぶべくもない。

殿村藍田は、西川寧を中心とした、碑学派が主流といえる関東の会派に所属するが、孤高を持するが如くに帖学の人であった。主に明清の文人的作風が真骨頂なのだが、帖学の祖といえる王羲之への憧憬と哲学もあつた。

とにかく私は羲之を攻めているんです。．．．辛うじて宋まで位はわかつてきたような気がするんですが、それから上にはまだどうしてもいけない。．．．

（「書齋を訪ねて殿村藍田」Ⅱ『書道』七巻二号、昭和三十六年）

こう言いながらも、王羲之への反骨も示す。

王羲之のなしとげた一種の定型は、現在猶その形影をとどめ今だに高度の指導性を持つて居るが、．．．彼への遡及に終始して良いのだろうか。．．．我々は大いに彼を否定して臨まなければならない。

（「古典研究の問題」Ⅱ『書品』一六号、昭和二十六年五月）

この考えは、戦後の書道界に於ける時代性というものもあるが、王羲之へ向かう苦悩が分かる。

殿村藍田は、富岡鉄斎（一八三七～一九二四）に傾倒した時期もあつた。年の差七十六歳。殿村藍田が生まれた時、富岡鉄斎はまだ存命中である。古き優

れた模範となるものが「古典」とされるのだが、藍田―鉄斎の関係から考えた時、現役部員からすると殿村藍田は既に「古典」と成り得はしないだろう。現役部員との年の差は、³⁰歳くらいとなる。弟子が真似れば「師風の継承」とだけ言われてしまうのだろうが、古典として捉えるならばまた違った探求と学書が成し得、新しい作風が生まれそうだ。

部員に殿村藍田や中野越南、赤羽雲庭、日比野五鳳、古谷蒼韻といった本格の近代作家の研究と古典との関わりなどを学書として勧めたいのだが。部員からもっと興味を持って食らいついて来る人が出てきて欲しいと思う。

徳島県立文学書道館にて「書の魔術師 殿村藍田」(二〇二五年六月十四日(土)～八月三日(日))が開催される。今から胸が高鳴り、興奮している。

作品制作の方法―臨書と創作―

臨書

歴史上の優れた書の古典を手本として、それを真似て書くことを臨書と言います。書道の学習で最も基本となる方法で、伝統的には次の三つの段階を踏むのが良いとされます。

(1) **形臨** 文字の形や筆遣いを似せて書くことです。古典をよく観察し、できるだけ古典に近づけて書くことが学習の出発点となります。

(2) **意臨** 形に拘らず、古典の雰囲気や精神を汲み取って書くことです。意臨が重視されるのは、形だけを追っていると時に筆運びのリズムが失われ、浅い印象の書になってしまうことがあるからです。また、古典の中には模本（敷き写し）や拓本（石に刻し、それを墨で写しとったもの）だけが残り、元の姿が伝わっていないものもあります。そのようなものを臨書する際には、想像力を働かせて書くことが必要です。

(3) **背臨** 古典を見ずに、記憶を頼りに再現して書くことです。古典をいかに観察し、理解しているかが問われます。

形臨、意臨、背臨と進むにつれて、臨書には書き手の個性が強く現れるようになります。臨書は単なる模倣ではなく、一つの表現方法なのです。臨書作品は、そのような学習の成果を作品として形にし、発表するものです。

臨書の対象となる古典が載る冊子を法帖と言います。初めから芸術作品として制作されたものもあれば、石碑や手紙、文章の下書きなど、実用的な目的で書かれたものもあります。

京大書道部の書展では、臨書作品の場合キャプションに臨書した法帖を掲示しています。ぜひ作品と見比べてご覧ください。

創作

臨書に対して、自分が表現したい言葉を書くことを創作と言います。

自分で考えた言葉を書くこともあれば、漢詩や漢文、和歌や俳句、詩や短歌、歌詞などに題材を求めることもあります。

作品の構成や書体、書風は、選んだ言葉を最もよく表現できるように考えて工夫します。臨書の学習を活かし、古典の表現方法を取り入れると、作品に深みと味わいを出すことができます。

闇雲に言葉を書くのではなく、自ら感動や想いを言葉に託し、それに合った表現を探して書くのが創作作品です。

作品の構成―印と落款―

落款

作品の末尾に書く署名とそれに続けて押す印を落款・落款印と言います。名前のほか、語句の出典や臨書した古典の名、製作した場所や時間を書くこともあります。

印の種類

落款印以外にも、作品の右上（冒頭部分）に押す引首印や、自由な位置に押す遊印が加えられることがあります。

書の分野と有名古典について

漢字には楷・行・草・隸・篆の五つの書体があります。数千年前に、身の回りの事物を書き記さんとする行為によって象形的な篆書が生まれ、文字としての美しさや抽象性、実用性を求める中で隸書が発展しました。現代でもよく使われている楷書・行書・草書はこの篆書と隸書を基盤として作られた書体です。一方で、仮名・調和体は、日本が中国から漢字を輸入し独自に書法を発展させてきた結果生まれた書の分野と言えます。

一口に〇書と言っても、書く者の呼吸や心の動き、如何なる結体を良しとするかという考え方や経験などによって、その書が持つ趣は変化します。そこに書の面白さや芸術性が在るのではないでしょうか。ぜひ以下の有名な古典や色々の作品などを見比べて、その面白さを体験してみてください。

「楷書」は永字八法と呼ばれる、点・画・転折・払いに関する一定の規則によつて書かれる書体です。その書法は唐代に完成され、堂々たる威厳と流麗な美しさを併せ持つ素晴らしい古典が多く残されています。

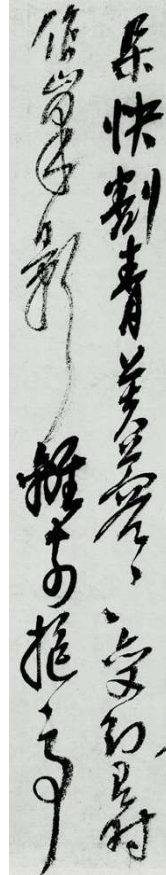


画像…九成宮醴泉銘（欧陽詢）

「行書」は一般的に隸書の速書き体として生まれたと言われており、点画を繋げたり省略したりして書かれる書体です。崩し方はさまざまで、曲線を軸とした流線的な書風もあれば、直線を軸とした力強い書風もあります。



画像…蘭亭序（王羲之）

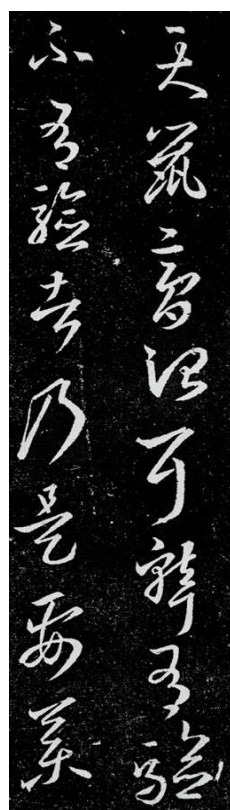


画像…詩稿（吳昌碩）

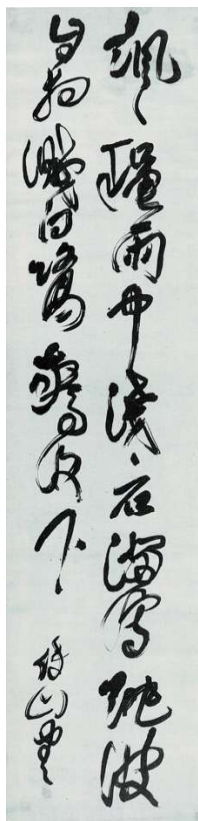


画像…祭姪文稿（顏真卿）

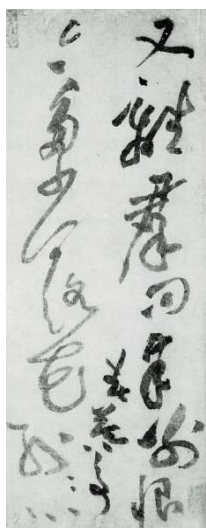
「草書」もまた隷書の速書き体として、漢代に起こった書体です。唐代までに一定の崩し方が確立された後、宋から明・清にかけて、その自由度の高さに表現性を見出した能書家らによって芸術性が高められました。



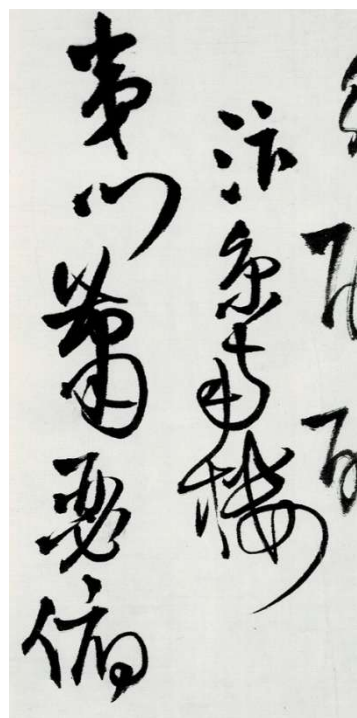
画像…十七帖（王羲之）



画像…五言絶句四屏（傅山）



画像…李太白憶旧遊詩卷（黄庭堅）



画像…草書七律五首卷（王鐸）

「隷書」は篆書から発展し、五体の中で唯一「波磔」と呼ばれる払いのような横画を持つ書体です。文字として整えられつつも篆書の象形的な字形が残っており、筆法もまだ習熟していない段階ともいえませんが、かえってそこに造形美と素朴な古籀の風味を併せ持った魅力を見出すことができます。



画像…曹全碑（筆者不明）

「篆書」はその絵的な造形に特徴がある最古の書体です。世界に存在する事物と文字とを初めて繋げた記号であり、その字形から想起されるイメージによって、豊かな表現性を持っています。漢字の意味を知らない人にも魅力が伝わる作品を書くことができます。



画像…石鼓文（筆者不明）

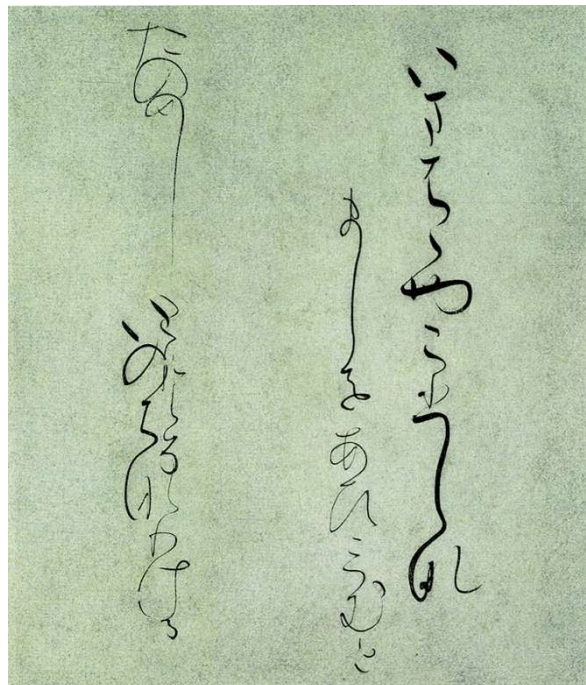


画像…石鼓文（呉昌碩）



画像…自書七言絶句十二屏（傅山）

「かな」は日本語の音を割り当てた漢字の一部を変化させて作られた、日本固有の書法です。柔らかく流れのある運筆が特徴的で全体に寛雅な雰囲気を持っています。散らし書きという独自の構成法も漢字書には無い魅力の一つです。



画像…升色紙（伝行成）

「調和体」あるいは「近代詩文書」は戦後に一般的な可読性を重視する動きによって起った書法です。文学作品や詩・短歌・俳句、歌詞やセリフといった題材を用いるので、文意を加味した文学性のある、また書道をしていない人にも親しみやすい作品を作ることができます。

（著作権の関係上、画像の掲載は控えさせていただきます。）

作品一覽

贊助作品

大原蒼龍……………創作・『大和』……………11

個人作品

二回生

石川和樹……………臨書・『礼器碑』……………15
桂木結紅……………臨書・倪元璐『行草五言律詩軸』……………11
河合真弥……………創作・『高適詩』……………12
近藤咲耶……………臨書・張瑞圖『論書卷』……………13
櫻井すみれ……………臨書・米芾『叔晦帖』……………13
新長慎之助……………臨書・吳昌碩『臨石鼓文四屏』……………14
田中碧……………臨書・黃庭堅『松風閣詩卷』……………14
遠山菜々香……………創作・『回顧』……………19
原田明澄香……………臨書・『上賀茂神社 石碑』……………17
藤木庸……………臨書・王鐸『臨王獻之省前書帖』……………13
……………臨書・藤原行成『白氏詩卷』……………18
星出茉胡……………臨書・太宗『温泉銘』……………13
柳田陸……………臨書・『集王聖教序』……………16
……………創作・『邁進』……………19

三回生

岩崎沙奈……………創作・『夏浅し』……………20
影山稜真……………創作・『徐貴詩』……………19
……………臨書・王鐸『蔣君卅載吳淞相邀』……………15
加藤杏次郎……………臨書・傅山『龍王社鼓七言詩軸』……………11
……………臨書・伊秉綬『光孝寺虞仲翔祠碑』……………14
川上雪乃……………臨書・陳福坤『金剛般若波羅蜜經』……………17
鈴木理仁……………創作・『孤雲獨去閑』……………20
……………創作・白居易『題潯陽樓』……………15
妹尾直弥……………創作・『幽步』……………13
中野花音……………創作・『カラフルより』……………19
……………臨書・楮遂良『雁塔聖教序』……………12
樋口珠穗……………臨書・王鐸『家中南澗作』……………17
吉田慎二郎……………創作・『神名備能』……………17

四回生

植村亮	創作・『守破離』	16
齋藤亜紀	創作・『秋Ⅱ』	12
永田はるな	創作・『島崎藤村 労働雑詠より』	12
松井康平	創作・『張好好詩』	15
松阪明日香	創作・『寄り添う』	15
山田健太	臨書・『空海『風信帖』』	20
Lee E Wei	創作・『王籍「入若耶溪」』	18

修士一回生

須田光太郎	創作・『かりのやどり』	16
-------	-------------	----

修士二回生

飯田望未	臨書・『安呉論書』	14
素鴻	創作・『自由民主萬歳』	18

合作

青山尊 (M1)、木村隼翔 (M1)、小谷大翼 (B5)、須田光太郎 (M1)	創作・『孟子句より』	22
吉田慎二郎 (B3)、山田健太 (B4)	臨書・『小野道風『玉泉帖』』	21
河合真弥 (B2)、近藤咲耶 (B2)、遠山菜々香 (B2)、藤木庸	創作・『ややえんどら』	21
川上雪乃 (B3)、妹尾直弥 (B3)	創作・『縫』	22
奥川ほか (B3)、樋口珠穂 (B3)	臨書・『(和銅五年長屋王願経) 大般若経卷第二十三』	22
影山稜真 (B3)、中野花音 (B3)	創作・『睡ゝなめ』	22
近藤咲耶 (B2)、中野花音 (B3)	創作・『いゝ掘れワンワン』	23
加藤杏次郎 (B3)、妹尾直弥 (B3)、中野花音 (B3)、吉田慎二郎 (B3)	創作・『四川麻婆』	23

賛助作品

技術顧問 大原蒼龍 先生

『大和』

日本の美を意識した作品

朱の扇面型に草書で書いた。小さい字であつても大らかでスケールのある書になればと願った。



個人作品

1 桂木結紅 二回生

臨書 倪元璐『行草五言律詩軸』 二八

「滿市花風起。平隄漕水流。……」

今後も尽力します。

滿市花風起。平隄漕水流。北春好。手更。
為晚。倚舟上。望天遠。雲氣。相。紫。中。杖。藜。酒。
皮。不。轉。肘。夕。陽。成。紫。山。密。丈。

2 加藤杏次郎 三回生

臨書 傳山『龍王社鼓七言詩軸』 二八

「龍王社鼓鬧村零拋卻殘書也杖扶愁無……」

ついに、初の二八作品を書きました。龍王って本当にかっこいいですよ。ドラクエモンスターズ・ジャーカーは不朽の名作です。かっこいい龍王になれるよう、日々邁進して行きます。

龍王社鼓鬧村零拋卻殘書也杖扶愁無……
書之杖扶愁望面極耐花銀作
好慶贈係常事配

杏次郎 臨

3

河合真弥 二回生

創作 『高適詩』 二八

「嗟君此別意何如 駐馬銜杯問謫居 巫峽啼猿數行淚
衡陽歸雁幾封書 青楓江上秋天遠 白帝城邊古木疎」
黒よりも白を意識しました。

嗟君此別意何如 駐馬銜杯問謫居 巫峽啼猿數行淚
衡陽歸雁幾封書 青楓江上秋天遠 白帝城邊古木疎
河合真弥

4

齋藤亜紀 四回生

創作 『秋Ⅱ』 二八

「江城如画裏山晚望晴空秋色老梧桐兩水夾明鏡双橋落彩虹人煙寒橘柚臨風懷謝公」

篆李白の五言律詩「秋に宣城の謝兆北樓に登る」です。偶然選んだ漢詩が秋の詩だったので、冬樟展に出品した『秋』という作品に続けてこの作品名にしました。次は『秋Ⅲ』ですかね。

江城如画裏 山晚望晴空 秋色老 梧桐兩水夾明鏡
雙橋落彩虹 人煙寒橘柚 臨風懷謝公
亜紀

5

中野花音 三回生

臨書 緒遂良『雁塔聖教序』 二八

「大唐三藏聖教序。太宗文皇帝製。盖聞。二儀有象。顯覆載以含生。
四時無形。潛寒暑以化物。是以窺天鑒地。庸愚皆識其端。明陰洞陽。
賢哲罕窮其數。然而天地苞乎陰陽。而易識者。以其有象也。陰陽處乎
天地。而難窮者。以其無形也。故知。象顯可徵。雖愚不惑。形潛莫
覩。在智猶迷。況乎佛道……」
がんばりました！雁塔だいすきだあ！

6

永田はるな 四回生

創作 『島崎藤村 労働雑詠より』 二八

「皆な土くれの苔一重霧立つ空に入相の精舎の鐘の響くとき、あゝ驕慢と歓喜
と力を息に吹き入れて勝ちて帰るの勢いに」

念願の二八調和体をやつと形にすることができました！力強く、かつこよく、
でも調和体らしい柔らかさも兼ね備えた作品を目指しました。めっちゃ難しか
ったけど、4年目のスタートにふさわしい作品ができたのではないかと思います。

皆な土くれの苔一重霧立つ空に入相の精舎
の鐘の響くとき、あゝ驕慢と歓喜と力を息
に吹き入れて勝ちて帰るの勢いに
永田はるな

7
妹尾直弥 三回生
創作 『幽歩』 二八

「幽歩林陰晚 詩成薄醉餘 高花兼雨墜 遠柳帶煙疎
網濕漁歸處 鐘昏僧定初 夜涼心似水 塵夢久銷除」
やりたいうことをやりました。

8
星出茉莉 二回生
臨書 太宗『温泉銘』 二八

「獨痾蕩療。療俗醫民。鑠凍霜夕。飛炎雪晨。林寒尚翠。谷暖先春。年序屢
易。暄涼幾積。其妙難窮其神靡覲。落花……」
温泉銘を書くのは二回目です。楽しかったです。

獨痾蕩療療俗醫民鑠凍霜夕飛炎雪
晨林寒尚翠谷暖先春年序屢易暄
涼幾積其妙難窮其神靡覲落花

9
藤木庸 二回生
臨書 王鐸『臨王獻之省前書帖』 二八

「省前書帖有集聚意當能果不足下佳不聞逼遣下甚急想以……」
wow 鐸は難しいけど楽しいですね。

10
近藤咲耶 二回生
臨書 張瑞図『論書卷』 半切

「漢武帝好道憑虛欲仙索靖書如飄風忽舉鸞鳥乍飛梁鵠書如太祖忘寢觀者喪目皇
象書如歌聲繞梁琴人捨徽衛恆書如插花美」
自分が行間フェチであることに気づきました。良い行間を生み出せていたら嬉
しいです。

漢武帝好道憑虛欲仙索靖書如飄風忽舉鸞
鳥乍飛梁鵠書如太祖忘寢觀者喪目皇
象書如歌聲繞梁琴人捨徽衛恆書如插花美

11
櫻井すみれ 二回生
臨書 米芾『叔晦帖』 半切

「余始興公故爲僚宦。僕與叔晦爲代。雅以文藝同好甚相得。於其別也。故以祕
玩贈之。題以示兩姓之子孫。」
書道のために筋トレを始めました。

余始興公故爲僚宦僕與叔晦爲代
雅以文藝同好甚相得於其別也故
以祕玩贈之題以示兩姓之子孫

「松風閣依山築閣見平良川夜闌箕斗插屋椽我来名之意」
いつも締切ギリギリで字数を大幅に削減しています。今回もそうです。

松風閣
依山築
閣見平
川夜闌
箕斗插
屋椽我
来名之
意

「田車孔安。鑒勒馬鑿。四介既簡。左驂旂々。右驂隼々。迨以躋于邊。迨戎之夫。宮車其寫。」
読みたいです。

「呂望翩仙接乙瑛、峻嚴孔羨毓任城。歐徐倒置滋流弊、具體還應溯巨卿」
普段とは違う書体にしてみました。

「光孝寺新建虞仲翔先生祠碑通奉大夫廣東布政……」
細字だけで隷書を嗜んでおります。最近はチーズ工房で働きたい欲がふつふつと湧き上がっております。外国人の方に写真撮影を頼まれた場合は、セイチー
ズと言うよりもワンツースリーの方が無難だと信じています

光孝寺新建虞仲翔先生祠碑通奉大夫廣東布政使司布政使南城曾燾謹識
大用江南揚州府知府寧化伊秉綬書上古聖人既綏四裔矣定其宅第而
幽墨出鄉益已放窮奇渾敦者而後世已蒙屈辱賈誼爲累矣夫何益之有
軍用之薦履予朕屈賈事多望古而馮焉屈賈人及進耶而不却當局則述
轍相尋焉仲翔親臨此各營營屈賈身世屈賈心蹟飲之可悲焉夫孫氏卿
江表動搖朝報風三仲謀以皇雄並坐席父兄出華屈賈忍辱任才尚計操生
文世世以有人爲憂方將師事子而兄事之理聘求名士收拾人心又
之歎不以其有人爲憂方將師事子而兄事之理聘求名士收拾人心又

16

松井康平 四回生

創作 『張好好詩』 半切

「主公再三嘆、謂言天下殊。贈之天馬錦、副以水犀梳。龍沙看秋浪、明月遊東湖。自此每相見、三日已爲疏。玉質隨月滿、艷態逐春舒。絳唇漸輕巧、雲步轉虛徐。」

あまり経験のない書き方に挑戦してみました。

主公再三嘆謂言天下殊贈之天馬錦副以水犀梳龍沙看秋浪明月遊東湖自此每相見三日已爲疏玉質隨月滿艷態逐春舒絳唇漸輕巧雲步轉虛徐
乙巳五月康平書

17

松阪明日香 四回生

創作 『勸韋酒歌』 半切

「白露濕庭砌 皓月臨前軒 此時去留恨 含思獨無言」
初心にかえりました。

白露濕庭砌皓月臨前軒此時去留恨含思獨無言

18

石川和樹 二回生

臨書 『札器碑』 半切

「脩飾宅廟。更作二興。朝車威(憲)。宣抒玄汗。以注水流。法不煩。備而不。上合紫臺稽之中和。下合聖制。事得禮儀。」
隸書に挑戦しました。波磔が難しかったです。

脩飾宅廟更作二興朝車威宣抒玄汗以注水流法不煩備而不書上合紫臺稽之中和下合聖制事得禮儀
和樹臨

19

影山稜真 三回生

臨書 王鐸『蔣君卅載吳翁相邀』 卷子

「蔣君卅載，吳翁相邀。飲酣歡洽，慨爽吾……」
王鐸を書きたかったのです。

20

鈴木理仁 三回生

創作 白居易『題潯陽樓』 二八

「常愛陶彭澤 文思何高玄 又怪韋江州 詩情亦清閑……」
二八はつくづくよどこまでも

21

須田光太郎 修士一回生

創作 『かりのやどり』 色紙

「家居のつきづきしくあらまほしきこそ、かりのやどりとはおもへど、興あるものかな」

先日卒業式の日、文学部の卒業生代表がお祝いの言葉で引用していた、『徒然草』の一節です。家というのは、一時的な居場所であっても、自分のいる限りは、理想的な空間であつてほしいものだ、そうなるように努めてこそ、おもしろい。何事も、突き詰めれば人生も、そのようだ。そこまでは書いていませんが、そう読みました。書として素敵な作品になれば、と思います。

かりのやどり

かりのやどり

かりのやどり

かりのやどり

かりのやどり

22

植村亮 四回生

創作 『守破離』 聯落

「守破離」

大人しく大字書いときます。



23

柳田陸 二回生

臨書 『集王聖教序』 半切

「陰陽處乎天地。面難窮者。以其無形也。」
ずつと前に練習で全臨した集王聖教序を作品にしました。

陰陽處乎天地而難
窮者以其無形也

陸

24

吉田慎二郎 三回生

創作 『神名備能』 全紙

「神名備能 三諸之山丹 隠蔵杉 思將過哉 蘿生左右」
空海の倣書を目指しました。

25

原田明澄香 二回生

臨書 『上賀茂神社 石碑』 色紙

「風そよぐ ならの小川の 夕暮は みそぎぞ夏のしるしなりける」
旧暦の六月三十日に、「六月祓」という禊の行事があるそうです。新旧の暦の違いはあるものの、今回の書展の開催日と近かった為選びました。部室で法帖が見つからなかったため、和歌の舞台・上賀茂神社で調達。これぞ京都の地の利の成せる業……。

26

川上雪乃 三回生

臨書 陳福坤『金剛般若波羅蜜經』 半紙

「一切有為法如夢幻泡影如露亦如電 應作如是觀」
今年二十歳の誕生日を迎え、なにかそれに関連づけた作品を作りたいと思い、この一節を選びました。題材は決まったものの構成や書体に悩んでいたところ、偶然見つけた作品があまりにも魅力的だったので臨書しました。

27

樋口珠穂 三回生

臨書 王鐸『家中南潤作』 二六

「家礪誰登眺。天寒草木稀。雨餘孤岫出。日莫衆禽依。諸寇郡仍緊。三年……」
なかなかうまく収まってくれなくて苦労しました……

和様やつてる時が一番楽しいです。嘘です。苦しいです。

二月十五日我國國家數月
月好也傳唯此係不
望也此等事滿山是
裏分毫雷澤水高銀
兩數計請來能多送
重情回頭相親送被
二月明年正月得月
昭臨建寧

送甌州守大夫謝惠

起鰭

戚里誇為賢，張禹侮
求視，他如詩人魯。魯
游孤風索，所水年々
青藜去。

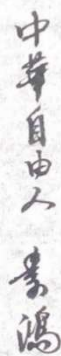
晚上天津稿閑望偶

通志郎中張貞外

携酒同飲

上聞宮裏建鐘樓
樓頭殘月小窗閑
疏影搖風動
天邊河漢映初星
似在
以意聽半出烟波
遙相
遙傾一酌始知地上青
和

かつて短い間に自由民主があり、やがて奪われて何十年も経ったその土地に住んでいた人として、日本やその他の先進諸国がくれた自由の空気への感銘と、いまだ光の届かぬその遥かなりて遥かならぬ土地に自由民主主義よ来れという献身の叫びを、渾身の力と痛切な志をこめて大字で表現してみた。



「餘艖何泛泛，空水共悠悠。陰霞生遠岫，陽景逐迴流。」

蟬噪林逾靜，鳥鳴山更幽。此地動歸念，長年悲倦遊。」

色々うまくならなくて、ちょうど心が晴れないタイミミングにこの漢詩に出会
い、どこか心に響くものがありました。2025年のこの気持ちを書き残したいな
と思って書いてみました。

31

柳田陸 二回生
創作 『邁進』 全紙

「邁進」

高木聖雨氏の作品に憧れて書いてみました。大きい字を大胆に書いたのは初めてだったので、楽しかったです。

32

中野花音 三回生
創作 『カラフルより』 全紙

「この世界があまりにもカラフルだから、ぼくらはいつも迷ってる。どれがほんとのいろかわからなくて。どれが自分の色かわからなくて。」
自分の色も他人の色も世界の色も全然わかんないけど、理解しようとすることは大事ななんだろうな。と常々思っています。

33

影山稜真 三回生
創作 『徐貴詩』 半切二聯

「啼鳥雲山静 落花溪水香」

半切二聯を書きたかったです。

34

遠山菜々香 二回生
創作 『回顧』 半切

「曉發柳林戌遙城聞五鼓憶興故人眠此時猶暗語」
楷書以外に取り組むのは高校ぶりでした。創作の幅を広げようと思いましたが後悔が募っています、一生楷書でいいです。

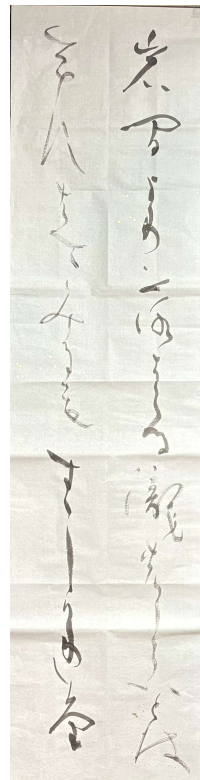
「風信雲書自天翔臨。披之閱之如揭雲霧兼……」

先日、カラオケで友達が、「時を越えて君を愛せるか」の歌詞で有名な小田和正の歌を熱唱した時、途中まで明治安田生命の『が頭から離れなかったのだが、一曲全体を聞き終わった時には、「君は空を見るか、風の音を聞いているか。」という歌詞が頭から離れなくなっていた。その思い出と、この風信帖には、特に何の関係もない。

風信雲書自天翔臨
披之閱之如揭雲霧兼
思止觀妙門頂戴
少不修居之念供
得世何如家難推
能命跡攀彼嶺限
能必能樂而思占
及宇山集金一
滿空今日
仁恩後望
漸此院此望
希
九月十七
東嶺全圖
忽披誰多
御香雨果
智尊者
龍通此法
日也
指
九月十七

「岩間より落ちくる瀧の白糸はむすばで見えるも涼しかりけり」

「むすばで」は水を手ですくう「掬ぶ」の意味で、清流を「瀧の白糸」に見立てた比喻にからませ、糸の縁語の「結ぶ」と掛詞となっています。作品名の『夏浅し』は、夏に入ってからまだ日が浅くほんのりと夏を感じる程度ということばを見つけて引用しました。



「孤雲獨去閑」

少なくとも梅雨のことではなさそうだ。



合作

38

吉田慎一郎 (B3)、山田健太 (B4)
臨書 小野道風『玉泉帖』 全紙

「玉泉南潤花奇怪、不是似花叢似火堆。今日多情只我到、每年無故為誰開。寧辭辛苦行三里、更与留連飲兩盃。猶有一般孤負事、不將歌舞管絃來。……」
落ちていた単体字から自叙帖を思わせる草書まで、たいへん変化に富む。

玉泉南潤花奇怪
不是似花叢似火堆
今日多情只我到
每年無故為誰開
寧辭辛苦行三里
更与留連飲兩盃
猶有一般孤負事
不將歌舞管絃來

39

河合真弥 (B2)、近藤咲耶 (B2)、遠山菜々香 (B2)、藤木庸 (B2)
創作 『さやえんどう』 全紙

「咲弥遠藤……」

まめにほうれんそうをする四人でいたいです。

咲弥
遠藤

無二種 昔鶴橋
帆速新張久遠惟
見長江王際活

おのの
さやえんどう
藤木庸

咲弥
遠藤
河合真弥
近藤咲耶

40

青山尊 (M1)、木村隼翔 (M1)、小谷大翼 (M1)、須田光太郎 (M1)
 創作 『孟子句より』 半切

「独楽楽不如与衆楽楽」

中国の故事成語で、『孟子』の一節が元となっています。要するに、みんなで
 楽しもうぜ！ってことです。

独楽楽不如与衆楽楽

41

川上雪乃 (B3)、妹尾直弥 (B3)
 創作 『縫』 四六

「信仰」

美山でグランピングしてたら思い付きました。

信仰

42

奥川ほか (B3)、樋口珠穂 (B3)
 臨書 『(和銅五年長屋王願経) 大般若経卷第二十二』 写経

「大般若波羅蜜多経卷第廿三……」

書いてるとお互い将来のこととか真面目な話がぼろぼろ出てきます。写経パワ
 ーですかね！？

大般若波羅蜜多経教 第廿三
 初教誡教授品第七十三 蔵法師書奉 詔
 復次善現所言菩薩摩訶薩者於意云何耶

43

影山稜真 (B3)、中野花音 (B3)
 創作 『眠いなあ』 一二六の六

「睡魔到来」

眠かったら寝てる。

睡魔到来

近藤咲耶 (B2)、中野花音 (B3)

創作 『ここ掘れワンワン』 全紙

「花咲か爺」

ここ掘れワンワンで有名な花咲か爺さんの犬の名前は「ボチ」らしいです。



加藤杏次郎 (B3)、妹尾直弥 (B3)、中野花音 (B3)、吉田慎一郎 (B3)

創作 『四川麻婆』 半切

「四川麻婆」

麻婆の素には四川式と広東式があるそうですよ。我らはクックドゥーの四川麻婆が大好きですよ。四川式の方が、麻（マー）と辣（ラー）が多いらしいです。



三回生

文	池内	紗世
京女	岩崎	沙奈
農	小川	絢加
農	奥川	ほのか
工	影山	稜真
工	加藤	杏次郎
京女	川上	雪乃
理	番	奕翔
京女	酒井	悠希
工	鈴木	理仁
農	妹尾	直弥
同志社	中野	花音
総人	樋口	珠穂
文	廣田	千裕
同志社	星野	真帆
医	吉田	慎二郎

四回生

総人	植村	亮
京薬	川崎	麻衣
総人	齋藤	亜紀
文	永田	はるな
理	中野	葵
教	服部	可奈子
総人	松岡	加純
農	松阪	明日香
工	宮原	康輔
立命館	八木	宣大
医	山田	健太
文	リーイーウェイ	
府大	松井	康平
ILAS	リード・オリ	

五回生

医	木下	美優
医	小谷	大翼
薬	由里本	陽香
武庫女	除本	真理

六回生

兵医	岡	雅博
----	---	----

修士一回生

農	青山	尊
薬	浅雛	穂乃花
文	木村	隼翔
文	須田	光太郎

修士二回生

教育	飯田	望未
神大	飯田	理愛
理	凌	楡凱
アジア・アフリカ研 緑川 茉歩		

【顧問・部員紹介】

顧問：京都大学大学院文学研究科准教授 成田健太郎

京都大学大学院文学研究科准教授 田中健一

技術顧問：日展会友 書家 大原蒼龍

一回生

経	稲波	利弥
薬	上田	穂空
法	上原	圭貴
法	大石	詩織
法	大向	夏未
薬	岡	柚月
総	尾角	星治
先端大	北野	愛
経	草野	周
法	佐野	千陽
同志社	島本	ももみ
文	曾我	春太郎
法	中野	泰章
薬	野未	侑里
工	長谷川	毅
薬	羽田野	百伽
理	三木	葵葉
工	宮本	凌汰
農	米本	早織
法	山口	野々葉

二回生

農	生野	尊彦
法	石川	和樹
同志社	稲葉	愛里沙
工	遠藤	祐吾
工織	大橋	未都
経済	越智	夢生
京女	桂木	結紅
薬	河合	真弥
農	河原	令歩
文	越中	優奈
薬	近藤	咲耶
京女	坂本	莉子
文	櫻井	すみれ
総人	新長	慎之助
工	竹内	悠太
法	田中	碧
ダム女	洞井	美菜子
同志社	遠山	奈々香
工織	奈良岡	諒亮
府大	西尾	明日花
文	野村	百加
同志社	原田	明澄香
工	藤木	庸
法	星出	茉胡
文	柳田	陸



書道用品店 書遊 公式アプリ

SHOYU OFFICIAL APP

すぐ使えるおトクなアプリ

お得な SALE 情報やクーポン配信、スタンプポイント機能など。
さらに便利に、さらに楽しい書道ライフを。



文房四寶(筆・墨・硯・紙)和紙工芸品 書画作品



書芸サロン 賀交

営業時間:10:00~18:00

〒605-0992

京都市東山区鞍町通七条上ル下堀詰町242

TEL/075-541-1112 FAX/075-541-1113

E-mail/info@shoga-sankou.co.jp

墨筆硯紙 書道用品一式

京都 古 栞 園

〒604-0916

京都市中京区寺町二条上

TEL(075)231-1531

FAX(075)231-0272



銘筆・名硯・古墨・文房四寶の店



香 摩 軒

OPEN 10:00~19:00
(不定休)

〒604-0912

京都市中京区二条通河原町東入ル

mb 090-3495-4060

TEL 075-231-1695 FAX 075-231-8768

e-mail nagaoka@kousetsuken.com



京都・書道用具店

松 栞 園

一般用の書道道具からプロ専用の用具
まで幅広く取り扱いしております。小売も
しておりますので、お気軽にお越し下さい。

京都市下京区柳馬場通仏光寺下万里小路町164

TEL 075-351-6380 FAX 075-361-8006

http://www.shoubaien.co.jp 定休日(日・祝日)

取扱商品

書道用具全般
毛筆・松栞園製
毛筆・中国製
墨・墨液 各種
紙・漢字・かな用
硯・下敷・印材
他・書道小物
水墨画用具

山 中 表 具 店

〒604-8102

京都市中京区姉小路通富小路西入菊屋町 567

TEL : 075-221-3381 FAX : 075-252-1987

https://www.yamanaka-hyouguten.com

京筆・京文房

りゅう し どう

龍 抄 堂

〒604-0916

京都市中京区寺町二条上ル要法寺前町 717

TEL. 075-252-4120 FAX. 075-252-0006

かな料紙・京染和紙
加工紙・画仙紙・半紙他

書道用和紙の専門店

紙の 津 久 間

京都市下京区新町通花屋町下ル

TEL (075) 371-8186 (代)

FAX (075) 371-8189

本書展開催に際しご協賛を賜りました。

心よりお礼申し上げます。